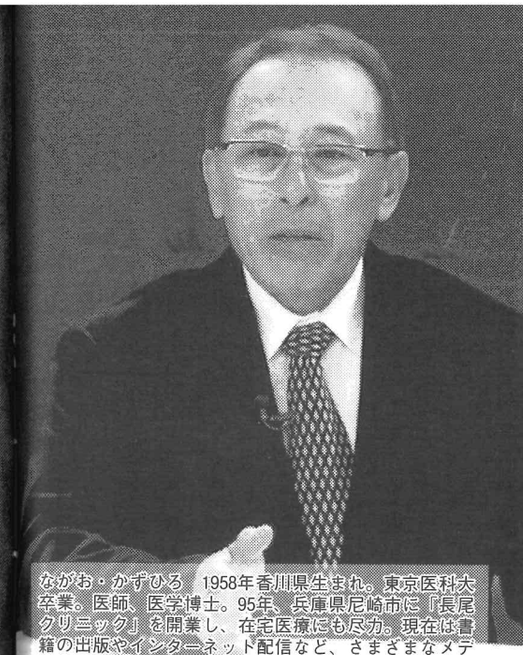
新型コロナワクチンとは何か、改めて問う

コロナワクチン接種後に家族を亡くした遺族の慟哭！

医師・長尾和宏×被害者遺族

新型コロナワクチン接種後、それまで健康だったにもかかわらず、突然死に近い形で命を落とした。その遺族たちが亡くなった経緯を、国の謝罪を求めて涙ながらに語る。その無念の叫びの聞き手は、コロナワクチン後遺症患者などを診察してきた長尾和宏医師だ。



ながお・かずひろ　1958年香川県生まれ。東京医科大卒業。医師、医学博士。95年、兵庫県尼崎市に「長尾クリニック」を開業し、在宅医療にも尽力。現在は書籍の出版やインターネット配信など、さまざまなメディアで長年の町医者経験を生かした医療情報を発信している。コロナ関連の主な著書として、『ひとりも、死なせへん』（全2巻）などがある

▼27歳の息子を亡くすのは人生を失うのと同義

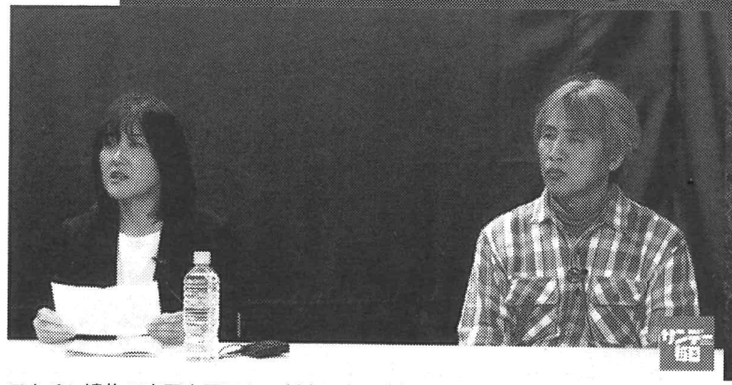
▼基礎疾患もない妻が突然、激しい脳出血で逝く

▼国はワクチン行政の失敗を認めて謝罪せよ

長尾和弘　私は医師になって40年経ちます。65歳の誕生日に医師は卒業して現在は診療はしていませんが、コロナ禍の時は重篤なコロナワクチン後遺症患者さんを250人ほど診ました。またワクチン接種から2カ月後、3カ月後に亡くなった方も3人看取らせていただきました。国による予防接種健康被害救済制度では、コロナワクチンによる死亡認定は900人を超えています。驚くほど、多くの方が亡くなっているのです。今日はそのご遺族おふたりにお話を伺います。

高野由里子（仮名）　私の息子は当時27歳で既往歴もなく、まさに健康そのものの若者でした。結婚したばかりで、実家の近くで新生活を送っていたのです。息子が3回目のコロナワクチンの接種をしたのは2022年4月、職域接種会場です。モデルナでした。

その日の夜から38度の発熱がありまして、カロナールを飲みながら翌日も家で休んでいました。息子の妻は仕事で不在でしたが、夕方5時半ごろになって「熱が40度になってしんどい」というLINEが来たそうです。それで6時ごろに帰宅すると、息子はリビングに仰向けに倒れていて、もう反応のない状態でした。すぐに119番通報し、妻が心肺蘇生措置をすると、鼻から出血があったといいます。救急隊が到着しまして、気道を確保すると、口腔内にも血液が大量に溜まっていました。搬送中も病院到着後も、気管内から鮮血が大量に出続ける状態だったといいます。そして病院で、死亡を確認されました。私と夫も、救急車で運ばれたとの連絡を受けて病院に駆けつけましたが、もう最期には間に合いませんでした。



ワクチン遺族の高野由里子さん（左）と吉田史郎さん

死因の究明が行われない現状

長尾　病院の対応はどのような感じでしたか。

高野　医師は、「長く救急をやっているが、このような症例は見たことがない」「コロナワクチン接種と関連がある」との診断でした。ただし、ひとりで倒れて亡くなったことから警察が介入しまして、監察医による遺体解剖が行われました。私たち家族は詳細な解剖を希望したのですが、受け入れ先が見つからないとのことで、地域の監察医へ回されて、簡単な解剖に留まりました。監察医の死因の見解は急性心不全というものでした。

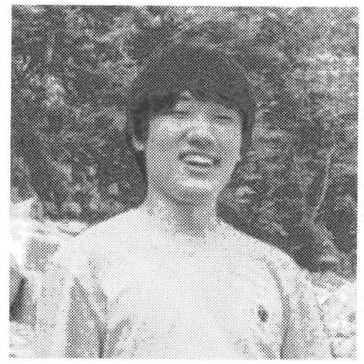
長尾　モデルナの3回目を打った翌日ということですから、本来であれば詳細に解剖しなければいけないんですけれどね。オートプシー・イメージング（死亡時画像診断）といって、CTなどの画像診断装置を用いてご遺体を検査し、死因を究明するという方法もあるんですよ。そういうのは行われたのでしょうか。

高野　CTは運ばれた病院で撮っています。救急医による死因の見解は「急性肺障害による肺胞出血、肺水腫」でした。また監察医のほうでは、ワクチン接種後すぐの死亡だったので一応、後々のもめごとに備えて心臓や肺、小脳の一部は保存していました。ただ、それを詳しく調べてはいないようでした。その後、一部を別容器に切り分けてもらい、こちらから他の大学教授のところにお預けしています。「大学の倫理委員会で体制が整えば調べます」とのことでしたが、今もそのままです。

長尾　実は他にもそういう方がたくさんいらっしゃるんですね。せっかく解剖したのだから、本来はきちんと死因の究明をしなければいけないんです。今のお話だと監察医側にそういった態度が見られないですよね。

　監察医による見解は心不全とのことですが、これは病気の名前ではなく、心臓の状態を表すものなので、死因とはいえないんです。ワクチン接種の翌日に突然死のような形で亡くなられたことから、血栓症だと考えられます。ワクチン接種後、3日以内に亡くなった方はほとんどそうだからです。恐らく、肺動脈血管が血栓により詰まった肺動脈血栓症、あるいは肺塞栓症でしょう。一般にエコノミークラス症候群といわれるのと同じ病態です。きちんと調べれば、解剖した時に肺動脈に血栓がびっしりある様子が肉眼でも確認できます。血栓も出血も同時に起こりますし、病態としては同様なのです。

　臓器が保存されているということですから、顕微鏡で見るか、あるいは免疫染色をすれば、今からでも因果関係をはっきり証明できます。毒性があるといわれているコロナワクチン由来のスパイクタンパクも見つかるはずです。ところで、国の救済制度には申請しま


未来を奪われた高野さんの息子さん

したか。

高野　はい。「コロナワクチンが原因なので、国の救済制度に申請してください」と病院側から言われました。亡くなったのが4月で、5月に一度申請書類を提出しました。ただもっと詳しい診療記録が必要ということで、それを病院に依頼して、あるだけの検査結果を集めまして、再提出したのは9月です。

長尾　それで認定されたのはいつですか。

高野　24年5月です。

長尾　ワクチン接種の翌日に亡くなったにもかかわらず、最初の提出から2年もかかっているわけですね。PMDA（医薬品医療機器総合機構）のほうはどうですか。これは医療機関や製薬企業からコロナワクチンによる副反応疑いとして政府に報告されるものですが、現在はその死亡報告数は220人を超えています。でも、そのほとんどは「情報不足等により因果関係が評価できない」としています。

高野　救急医がPMDAに報告書を上げてくださいましたが、みなさんと同じように、息子も「情報不足等により因果関係は評価不能」となっています。情報不足という文言を見まして、厚生労働省に電話で問い合わせたんですね。「追加の情報はどのように上げたらいいのでしょうか」と。そうしたら、「質問は役所を通してください」ということだったので、息子が居住していた市役所から問い合わせていただきました。2カ月後、厚生労働省からの返答は「追加情報の提出方法については示すことができません」というものでした。情報不足といいながら、情報収集のルートやそれを解析する体制はまったく構築されていないのです。

政府を信用したばかりに命を失う

長尾　ご遺族というだけで心労が多いのに、こんなふうに書類で苦労されるなんて、本当に信じがたいです。

高野　親にとっては、息子を亡くすというのは、すべてを失うのと同じです。もう生きているのかも、言葉には表せないような苦しみがずっと続いています。もう地獄とでもいうのか。睡眠や食事も取れなくなって、体調も崩れてしまって、これは親の生命の危機でもある、とも感じました。本当に、自分が死んだほうがよほど良かったと思います。

以前は人前でも涙が溢れてくるような時期もありましたが、最近はコントロールできるようになってきました。でも悲しみが薄れたというよりは、絶望している状況に慣れてきたような感じで。この約3年、よく生き抜いてきたな、と。

それは息子の妻も同じです。ふたりは大学生の時からの長い付き合いを経て結婚したばかりで、これからささやかながらも幸せな家庭を築いていきたいとの喜びに溢れていました。そのまさにこれからという時に、その未来を突然、根こそぎ奪われてしまったのです。私たち家族もそうですが、ふたりの無念を考えると、とてもこの現実を受け入れることはできません。

長尾　若い人は新型コロナに罹（かか）っても軽症だし、これだけ健康被害を起こす可能性のあるワクチンを、そもそも打つ必要なんてなかったんです。でも学校や職場で強制されたり、周囲のために、という国の言葉を信じて打ってしまった。

高野　息子も、自分の健康を考えてというよりは「思いやりワクチンを」と言われて、公衆衛生のために打ったと思います。幼い頃から穏やかで素直な性格で、家族や友達、周りの人を大切にする優しい子でした。

当時のワクチン担当大臣はCDC（アメリカ疾病予防管理センター）の発表に基づくものとして「米国では2億回打って死亡はゼロ」などの情報を若者向けに発信していました。その時点ですでに、国内で接種

後死亡の報告が国に上がっていたにもかかわらずです。そういった危険性に関する情報というのは、広く周知されることはありませんでした。そんな国の偏った広報によりコロナワクチンの安全性を信じた、私たち一般市民に落ち度はないはずです。

かすり傷ひとつしただけでも心配して、大事に育ててきた息子の体でしたが、国を信用したばかりに命を失ってしまいました。

長尾　もう言葉がないですね。それなのに、「重大な懸念はありません」と歴代の厚労大臣は繰り返し言い続けている。それは本当に許しがたいことです。先ほど高野さんが無念と仰（おっしゃ）ったけれど、本当に無念という以外、言葉が見つからない。今日は本当に有難うございます。もうひとり、いらしてくださったご遺族の吉田さんにお話を伺います。

短時間で脳内ヘルニアに

吉田史郎　私の妻は、21年7月に1回目のファイザーを打ちました。それから毎日、「腕は腫れてない？」「熱は？」と聞いていましたが、「全然、大丈夫よ」と答えていたんです。妻の接種から4日目、その日は私がコロナワクチン接種のために朝、自宅を出ました。すると家に着く直前だった10時半に、「頭が痛いから、すぐ帰ってきて」と電話があったのです。それで家に戻ると、妻がソファの上にぐったりとしていて。「気持ちが悪い」というので、吐きたいのかなと思ってバケツを準備して、背中をさすると手で払いのけたので、「あれ、何かおかしいな」と感じました。

その後、「救急車を呼んで」と妻から言われたので、119番して消防の方と話していると、もうその間に意識がなくなり、衰弱していく感じでした。救急隊の方が到着した時はすでに全然動けないし、何の反応もなく、ぐったりとしていて。当時は医療崩壊が叫ばれていた頃だったのでなかなか病院も決まらず、しばらくして近くの大きい病院へ搬送してもらいました。それで検査していただくと、脳出血により頭の中が血液でパンパンになっていて、脳ヘルニアにもなりかけている、と。左目の瞳孔もすでに開き始めているからもう難しい、とのことでした。たとえ手術をして血を抜いても本人の意識は戻らないし、歩くことも話すこともできないと言われましたが、万が一があるかもしれないと思って、手術をしてもらいました。

その後は、数値はわりと安定した状態でした。入院から5日目の朝も、いつも通り手を握って付き添っていましたが、足や両腕が少し動くような様子があったんです。素人目には何かいい反応が出たのかな、と思いましたが、脳からの信号が間違って伝わっているとのことでした。それで夕方には一度暴れるような感じになったので、痙攣（けいれん）止めの注射を打ってもらいました。それで落ち着きはしましたが、そのまま意識は戻らず、夜に亡くなりました。病名としては、左脳皮質下出血でした。

長尾　脳の血管が破裂し、恐らくこれ以上の出血はないというほどの出血があって、あっという間に血腫が大きくなったということですね。脳出血でも小さければ自然に止まるんですが、基礎疾患もない方が突然そこまで重大な病態になる、というのは普通はありえないことですよ。

ただし、21年7月初旬の段階では、まだコロナワクチンの健康被害というのは医師のあいだにもほとんど知られていませんでした。今の話を聞いてドキッとしたのは、僕も自分のクリニックで6月に高齢者の方に打っていましたし、僕自身も2回接種しているんです。後遺症患者や亡くなる方が出たという情報が僕のところに入ってきたのは7月になってからです。まさか3回目の接種があるとは考えていませんでしたが、その年の冬から再び始まるというので、僕は患者さんに打つのをやめたんです。

吉田　自分の場合は、妻の死の原因はコロナワクチンだと、疑いもなく思いました。ワクチンを打って以降も、今まで通りの生活しかしていないんです。では、何か特別なことをしたかと

問われれば、ワクチンしかない。医師に、「これはコロナワクチンが原因じゃないですか」と言ったら、「いや、違うよ」「もともと血圧が高かったんじゃないの」と言われました。

長尾　たとえ血圧が高くても、そんな短時間で脳ヘルニア起こすような急速な進行性の脳出血にはならないですよ。

吉田　解剖も一応お願いはしましたが、「解剖しても、ワクチンが原因だという証拠は100％出ない」と否定されました。僕も、その時はもうこれ以上妻を傷つけても、という気持ちがあってやめたんです。

ゴルフや旅行を一緒にしていた吉田夫妻

長尾　接種から4日目に様態が急変したということで、因果関係を問う時によく言われる時間的近接性は十分にあります。健康被害救済制度はどうでしたか。

吉田　救済制度のことは全然知らなくて、「コロナワクチン被害」とネット検索しても、当時はまったく情報が取れない状況でした。僕は愛知在住なんですが、22年10月にCBCテレビでコロナワクチン被害者遺族による「繋ぐ会」が結成されたという記者会見を観ました。それで会の代表の鵜川和久さんに連絡させていただいたんです。妻が亡くなってから、1年半後のことでした。

長尾　僕も鵜川さんのことはよく存じ上げています。その時、鵜川さんからはどう言われましたか？

吉田　100％ワクチンだね、と言われました。

長尾　同じような方がたくさんいますからね。

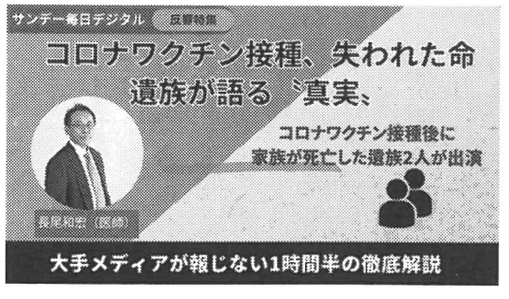
国への集団訴訟の原告に立つ

長尾　鵜川さんは一市民でありながら、ご遺族のために尽力されている。それは本来、国がやらなければいけないことなんですよ。

吉田　もし鵜川さんやご遺族の方たちとお会いできていなかったら、今よりもっと辛い状態だったと思います。本当に自分にとっては、唯一の小さな明かりのように感じられました。うちは子供がないこともあって、何をやるのも夫婦一緒だったんです。趣味のゴルフや旅行も、いつも一緒に行っていた。本当にふたりでひとりという感じで、ずっと過ごしてきて。60歳の還暦になったらあれをしよう、結婚25周年にはこれをしようと話していましたが、すべてなくなってしまいました。日ごろ使っていた靴からカバンから布団から、彼女のものはすべてまだそのままです。もう今日でも明日でも、帰ってきたら、と。やっぱり、そこで時間が止まっているんですよね。

　とても恥ずかしい話ですけれど、僕は家事は妻に任せきりで、本当にご飯も炊けないぐらい、何もできない人間で。それも含めてこの3年半はあらゆる意味で独りになり、何から何まで本当に大変でした。

吉田　それで、初めて救済制度があると知ったんです。実際に申請書を提出したのは昨年の3月で、12月末に認定の書類が届きました。



サンデー毎日デジタル
(https://nicochannel.jp/sundaymainichi/) で対談のノーカット動画をご覧いただけます。

長尾　昨年の4月17日に、新型コロナワクチンの危険性を伝えずに接種を推奨したのは違法だと、ワクチン接種後に亡くなられた方のご遺族ら13人が、国に対して集団訴訟を起こしましたね。私はその第1回口頭弁論も見に行きましたが、おふたりともその原告でいらっしゃいますね。

吉田　23年5月にNHKの「ニュースウオッチ9」で、コロナワクチン接種後に亡くなった遺族の発言を、新型コロナ感染で命を落としたように見せた偏向報道がありましたよね。それ以来、やっぱり世の中はおかしい、コロナワクチン被害者をないものにしようとしている、との確信を持ちました。妻のためにも自分のためにも、闘わなければいけないと決心して、今に至ります。まずこれ以上、被害が広がらないようにワクチン接種をやめてほしいですし、そして国は私たちに謝っていただきたい。それで納得できるかどうかわからないですが、とにかく納得するまでやっていきたいです。

長尾　どうしてご遺族や後遺症患者の方が、国家賠償請求訴訟までせなあかんのか、と思います。国は補償するのはもちろんのこと、一刻も早く被害を認めて謝罪しなければいけない。

ワクチン被害はもはや人災

高野　私も同じ思いです。総理も歴代の厚労省の大臣も役人たちも、ワクチン行政の失敗をきちんと認めて、亡くなった被害者や遺族や後遺症患者に謝罪をしてもらいたい。その思いで原告になりました。

　国は今も接種を中止していないどころか、推奨し続けています。ワクチンを強く推奨するという声明を出している学会も含めて、国民の生命を軽んじているとしか思えません。そしてそれは、被害者や被害者遺族を踏みにじっていることにもなるのです。

　そもそも国は、「懸念はない」という言葉とは裏腹に、安全性や有効性を示すデータをまったく提示できていません。でも反対に救済制度の死亡認定数を見れば、コロナワクチンは致死率の高い危険な薬剤であり、それにより大規模な薬害が起きているのは明らかです。これこそが揺るぎないデータだと思います。今まで中止する機会はたくさんあったにもかかわらず、それが行われていないのですから、もはや人災といえます。

長尾　昨年12月、厚労省の前でおふたりを含めた集団訴訟の原告の方たちと街宣をしました。足が凍えるほど寒いなか、なぜご遺族や後遺症患者の方たちが、こんなふうに街頭で声を上げなければならないのかと、もう怒りしか湧いてきませんでした。僕はワクチンを推奨している国側の責任者の医師もよく知っているから、「本当に、もういい加減にせいよ」との思いで声を上げました。

　それから、医療の現場にいる医師たちにも僕は言いたいことがあります。多くの被害が出ているというこの実態を知って、医師がみんなで「接種をやめよう」と立ち上がれば、コロナワクチン接種はやめられるはずです。それなのに、なぜ言わないんでしょうか。職場をクビになると恐れている人もいるかもしれないけれど、そんな病院、辞めたらいいじゃないですか。勇気を出してください。接種をやめることで、救える命がたくさんある。そのことのほうがよほど大事だし、それこそが医師の使命ではないでしょうか。それが行われないのなら、現在の日本にはもはや医学がなくなってしまった、ということになります。

　そしてメディア関係者も、我々の国でこういうことが起きている現実を、なぜ報じないのでしょうか。全部、隠蔽されている状況は明らかにおかしいと言わざるを得ません。

　今日は高野さんも吉田さんも、よくここに来てくださいました。辛い気持ちを語っていただいて有難うございました、とおふたりに感謝申し上げたいのと同時に、ご遺族にこんな活動をさせて申し訳ないという気持ちでいっぱいです。僕も力不足ですが、これからも一緒に訴え続けていきたいと思います。

本誌取材班

速報第２弾 大学合格者高校別ランキング
東京理科、中央、成城など29大学

サンデー毎日

SUNDAY MAINICHI

創刊102周年

大正11年3月31日第三種郵便物認可
2025年3月9日発行
第104巻第8号 通巻5875号
毎週火曜日発行（2月25日発売）
定価660円
2025年 3月9日号

CLASS SEVEN
巻頭グラビア&インタビュー8P

早慶W合格者の進学先に異変

コロナワクチンで家族亡くした遺族の慟哭

古着にハマるオトナが急増中!

田原総一朗が斉藤鉄夫に迫る
公明党は連立離脱し政権交代を目指せ!